

あとがき

九月十一日朝9時55分、世界貿易センタービル南タワーが爆発、巨大な煙がビルの残骸を輝かせながら落下してきた瞬間、全速力で走ってから、そのまま現在まで走り続けたような気がする。タワーが崩壊をはじめたあの時、わたしは逃げることで精一杯だったが、あれは爆音とともに次の暗い時代が幕を開ける歴史的瞬間だった。その時、わたしのなかで何かが確実に変化した。

ベッシー・ストリートと一緒にタワーを目撃していた、ピートの友人の息子でカメラマンのジョー・メーナードは、以来、自分の部屋に閉じこもって人に会おうともしない。彼の撮った写真を見せてもらって話を聞きたかったわたしは、会えなくて残念に思うが、彼の気持ちは誰よりわかる気がする。抱えてしまったものが大きすぎて、呆然とし、何もすることができない。それは、やり場のない怒りと癒しようもない悲しみと痛みをも伴う大きな衝撃、とでも表現すればよいだろうか。

わたしは取り憑かれたように、見たこと、感じたこと、考えたことを新聞や雑誌に書き、休む間もなく、本書に取りかかった。ほんの一カ月の間にこれだけの量の仕事をしたと思うと自分でも信じられないが、書き続けることで、唯一、自分をコントロールしてきたのだと思う。現場を歩いたり、ニュースを見たり、新聞、雑誌を精読することで、冷静に起こったことを理解し、その意味を確かめ、新しい発見をしながら書き続ける。そうしながら、実は、自分の抱えた痛みや悲しみ、怒りなどを癒していたに違いない。書くことができなかったら、あるいは書く場所がなかったら、わたしもジョーと同じように毎日、呆然として一カ月を過ごしたことだろう。

よくもこんなに元気だと自分でもあきれるくらい、毎日、疾走が続けられたのは、原稿が気持ちよく進んだからだだった。短期間に集中して書けるようになったのは、これまでに二十年間、わたしを鍛えてくれた多くの編集者のお陰だと痛感した。日付、時間はすべて米国東部時間を使い、敬称は省略させていた。

本書はアメリカン航空一一便とユナイテッド航空一七五便、さらにアメリカン航空七七便、ユナイテッド航空九三便による同時テロで亡くなったすべての被害者に捧げたいと思う。とくにポスターでしかお目にかかる機会のなかった高橋啓司さんの冥福を心からお祈りする。

二〇〇一年十月十日

まだ閉鎖されているトライベッカの自宅にて 青木富貴子